一平とエミリーとアジェイ

アメリカから来たエミリーと、インドから来たアジェイは、一年くらい前から日本に住んでいて、一平と同じ学校に通っています。

ある日、一平が、その二人と遊んでいた時のことです。エミリーが、

「わたしは、日本が大好き。町がきれいでしょう。学校は楽しいし給食はおいしいし、それに、みんなやさしいわ。」

と言うと、アジェイも、

「ぼくも日本が大好きだよ。日本の季節っていいよね。初めて雪を見てとても感動したよ。」

と、二人とも日本に来てよかったと言ってくれました。一平は、にっこりしました。

するとエミリーが、まだ、日本に来たばかりのころのことを話し始めました。

「日本に来て初めて分かったのは、サンドイッチとかステーキとかを、日本の人も食べていたことよ。毎日、お寿司とか天ぷらを食べているのかと思っていたのに。」

「あたりまえじゃないか。からあげだって食べるし、カレーも食べるよ。」

一平は、ちょっとむっとしたように答えました。

「だって、お寿司や天ぷらは日本の代表的な料理だってお父さんが教えてくれたのよ。アメリカにいた時、よく家族で食べに行ったの。おいしくて、わたし大好きだったわ。それから、日本には忍者がいると思っていたんだけど、本当はいなかったのね。」

一平は、飛び上がるほどびっくりしました。

「忍者が今も本当にいると思っていたの。それはとても昔の話だよ。」

すると、アジェイが、

「ぼくも忍者がいると思っていたよ。日本の忍者のアニメが大好きだったから。それに、日本の人は、みんな日本の着物を着ているのかと思っていたら、ちがうんだね。そういえば、ぼくは日本に来て、インドの男の人はみんなターバンをまいていると思っている人がたくさんいて、びっくりしたよ。ニューデリーを歩いていると、たしかに、ターバンをまいている人をときどき、見かけるけど、多いわけじゃないよ。それに、インドの全ての人が、

スプーンとかを使わないで、手で食事をしていると思っている人がいるし。」
と言いました。一平はびっくりしました。
「え、手でカレーを食べているんじゃないの。」
「家によってちがうよ。ぼくの家は、ずっと前から、スプーンとフォークを使って食べているよ。だいたい、インドではカレーって言わないよ。いろんな料理があって、その一つ一つに名前があるんだ。」
すると、エミリーが、話し始めました。
「わたしは日本に来て、アメリカの人は毎日のようにハンバーガーを食べて、コーラばかり飲んでいるでしょうって言われて、びっくりしたことがあったわ。」
二人の言うことは、一平にとって、初めて気づかされることばかりでした。
しばらくすると、エミリーとアジェイはお国自まんを始めました。
「アメリカはすごくすてきな国。とっても自由で、好きなことを楽しむ時間がたっぷりあるわ。それに、学校には、いろんな国から来た子どもがいるわ。毎日、友達といっしょに学

校の黄色いバスに乗って通っていたのよ。カーニバルでは、みんなでおもしろいゲームを作って遊んだの。とっても楽しかったわ。自分が調べたことを発表する会が一年に一回あって、わたしは、アライグマについて調べたの。そして、ねん土でそっくりな置物を作ったのよ。そうだ、ボランティアのじゅ業もあったわ。ただ、放課後は日本とちがって、学校では遊べなかったの。学校にはうわばきはなくて、外と同じくつよ。家の中でもくつをはいたまま生活するのよ。」

「インドの自まんは、五千年以上の歴史があることさ。それに、十二億人ものたくさんの人が住んでいるんだ。そうだ、ぼくの住んでいた町では、道を大きな牛が歩いているよ。インドでは牛をとても大切にしているんだ。象がいることだってあるよ。ぼくが通っていた学校は、英語でじゅ業をしていたよ。それから、自分のたん生日には、プレゼントをもらうんじゃなくて、友達とか先生におかしをプレゼントして、いっしょに祝ってもらうんだ。」

一平は、二人の話を聞きながら、他の国のことをもっと知りたいと思いました。